

下田歌子が作詞した岐阜県東濃地域の 校歌に関する調査報告

A Report on School Songs Written by Shimoda Utako in the Gifu Prefecture Tono Area

鈴木 隆一
SUZUKI Ryuichi

田口 修
TAGUCHI Osamu

【調査期間】 2012年4月～2020年2月

【調査対象および収集資料】

1. 巖邑尋常高等小学校校歌
2. 大成国民学校校歌
3. 岐阜県恵南実科女学校校歌
4. 阿木尋常高等小学校校歌
5. 久須見尋常高等小学校校歌
6. 加子母国民学校校歌
7. 陶尋常高等小学校校歌

はじめに

下田歌子は、現在の岩邑小学校の前身の巖邑尋常高等小学校の校歌をはじめ、岐阜県東濃地域（東美濃）にある何校かの学校の校歌を作詞している。だが、教育改革や学校の統廃合などで、戦後、下田が作詞した校歌は歌われなくなった。そのため、下田が作詞した校歌があるということは知られていたものの、どのような校歌がどれくらいあるのかは不明だった。

そこで、かつて岩村町の教育長を務め、現在、研究所の客員研究員と岩村親善大使である鈴木隆一は、実践女子大学プロジェクト研究所「下田歌子研究所」が発足した翌年の2012年から、下田が作詞した東濃地域の校歌の収集を始めた。そして、2019年からは恵那市在住の介護予防音楽講師の田口修が加わり、地域の高齢者などから聞き取り調査をするとともに、図書館の郷土資料や文献資料を調べた。

それにより、1902 (明治35) 年から1943 (昭和18) 年にかけて下田が作詞した7校の校歌を発掘することができた。本調査報告書では、以上の調査により入手した校歌の歌詞および楽譜を紹介する。なお、他に下田作詞の校歌がないか、下田が校長を務めた東京都や滋賀県、新潟県の学校にも問い合わせしてみたが、東濃地域以外には見つからなかった。

2019年からの調査では、記憶により再現した楽譜や作曲家が残した楽譜等をもとに、地元の小学生やコーラスグループに歌ってもらい、音源資料として残すことにも力を入れた。再現した校歌はYouTubeに開設した「下田歌子作詞校歌チャンネル」で公開しており、誰でも歌声を聞くことができる (<https://www.youtube.com/channel/UC22-b0gS8Oe6-NtJTEyF1IQ>)。

また、2021年1月31日には、久保貴子専任研究員による「下田歌子と音楽」と題する講演会をオンラインで開催するとともに、その後、鈴木隆一、田口修、久保貴子によって、「下田歌子作詞校歌にまつわる、初披露 ここだけの話」と題する座談会が行われた。久保専任研究員の講演は、上記の「下田歌子作詞校歌チャンネル」に収録されている。

1. 巖^{がん}邑^{ゆう}尋常高等小学校 (現、恵那市立岩邑小学校) 校歌

作詞：下田歌子 作曲：永井幸次
校歌の制定時期：1930 (昭和5) 年10月

ゆるぎなき 湯^{ゆづ}津いはむらの とこしえに
教^{おし}えの庭も 開^{ひら}け そわなん
しげれただ 御^{みよ}代の恵みの 雨^{あめ}にさる
美濃^{みの}の小山^{こやま}の 小松^{こまつ} 若竹^{わかしゅ}

巖^{がん}邑^{ゆう}小学校の前身は、1702 (元禄15) 年に設立された美濃国岩村藩校「文武所」(のちに「知新館」と改称) である。1871 (明治4) 年の廃藩置県により岩村藩は廃藩となり、岩村県を経て岐阜県に編入されるが、当時、岩村には岩村町、富田村、飯羽村の1町2村があった。このうち、岩村町と富田村の子どもは、1873年に藩校「知新館」を継承して開設された「知新義校」に通った。同校は、その後「知新学校」と呼ばれるようになり、1877年に「巖邑学校」、1886年に「巖邑小学校」、1893 (明治26) 年に、「巖邑尋常高等小学校」に改称される。

一方、飯羽村の子どもは「盈^{えい}進^{しん}義校」で学んだが、同校は、のち、「盈^{えい}進^{しん}学校」から「飯^い峡^{きやう}小学校」に改称される。また、1880 (明治13) 年には、富田村が富田学校 (のち「富田小学校」) を設立し、巖邑学校から分離する。

太平洋戦争前後、尋常高等小学校、国民学校と学校制度が変わる中、1940 (昭和15) 年に、

富田小学校と飯峽小学校が統合され、大成尋常高等小学校となる（後述）。そして、戦後、巖邑国民学校は岩村町立岩邑小学校となり、さらに、昭和の町村合併により、1962（昭和37）年に岩邑小学校と大成小学校が合併して、^{いわむら}岩邑小学校となる。

さて、資料1-1は、巖邑尋常高等小学校の校歌である。下田がこの詩を作詞したのは、1930（昭和5）年だと思われる（10月18日という説があるが、もう少し前だろう）。当時下田は76歳である。この歌詞には、どっしりとした神聖な巨石群、その名にゆかりのある岩村もこの学校も、いついつまでも永遠に、いよいよ開けていってほしいという下田の思いが込められている。

作曲者は、大阪音楽学校（現、大阪音楽大学）の創立者で、当時校長の永井幸次氏である。藤本葉子氏の「永井幸次作品目録」（『大阪音楽大学音楽博物館年報』21号、2005）によると、作曲は1930年10月と記載されている。また、作曲者永井幸次氏の直筆の楽譜（資料1-2）には「10月6日発送」とメモ書きがあり、この日に岩村に楽譜を送付したものと思われる。

資料1-1の歌詞の1番と2番が入れ替わっている楽譜もあるが、永井氏が書いた楽譜（資料1-2）は、資料1-1と同じ順番になっている。永井氏直筆の楽譜は大阪音楽大学の図書館に所蔵され、デジタルアーカイブ化されており、資料請求することによって閲覧が可能である。

永井氏への依頼は、1930（昭和5）年4月から1943（昭和18）年3月まで巖邑小学校の校長を務めた加藤護一氏が行った。その際の依頼文が大阪音楽大学に残されている（資料1-3）。依頼の経緯は明らかではないが、岩村町出身で戦後長年にわたり恵那地域で教職員として勤務した永井孝雄氏（故人）の親戚筋の縁で依頼したのではないかという情報があった。

戦後は、GHQの指導などによって戦前の教育体制を刷新する風潮もあり、下田が作詞した校歌は歌われなくなった。その後、長らく岩邑小学校には校歌がなかったが、1970年代に入り、校歌制定の機運が高まり、1977年（昭和52）に現在歌われている校歌が制定された（えなスクールネットワーク岩邑小学校ホームページ参照）。

ちなみに、岩邑中学校は、戦後の新制中学校で校歌が制定された形跡はない。だが、戦後、GHQによる日本の民主化政策の一環で、生徒会活動やPTA活動が盛んに行われるようになり、下記の「岩邑中学校生徒会歌」が作られた。この生徒会歌の作者は不詳であり、楽譜も現存していないが、50代後半以上70代半ばくらいまでの地域在住者の中には歌える方が多数存在する。

なお、現在の岩邑中学校校歌が制定されたのは、岩邑小学校と同じ1977年である。

岩邑中学校生徒会歌

理想の光 求めつつ 五百の心 一筋に
霧さえぎるも弛みなく 伸びる我らの姿見よ

岐阜縣岩邑尋常高等小学校校歌

下田歌子 作詞
永井幸次 作曲

♩ = 96
mf

一. ゆるぎな一き
二. しげれた一だ

6 *mp*

ゆづいわむらの
みよのめぐみの

どこしえ一に
あめにき一る

10 *f* *mp* *p* *rit*

おしえの
みのの

にわもひらけ
おやまのこまつ

そわなん
わかたけ

*楽譜の浄書は田口修が行った。

岐阜県巖邑尋常高等小学校校歌

大坂音楽学校長永井幸次作曲

$\text{♩} = 96.$
mf

ニ エ ル キ ナー キ ム ツ イ ハ ム ラ
ニ シ ゲ レ ター ダ ミ リ の め い み の

mp

ち ら に き ニ ミ ヲ シ ヘ ノ ニ ハー
こ ま う ソ ハ タ ニ

mp *rit*

十月五日祭迄

【資料1-3】巖邑尋常高等小学校校歌
 加藤護一巖邑小学校校長より永井幸次大阪音楽学校校長への作曲依頼文
 (大阪音楽大学図書館 所蔵)

ゆるぎなき、湯津^{ゆづ}いはむらの とこしへに
 教の庭も ひらけそはなん
 茂れたく、御代の恵の雨に着る
 みの、小山の 小松わか竹

○当所 岩村町は岐阜縣東部を、惠那郡南部の中心地、田畑下
 みて元得十郎松平氏受封地、藩校、知新館を号し
 文武を奨励し、地方的文化の他子先あるものあり、今日又
 其、小松村は、まじめな新館を、受け継ぎ、知新館と称
 し、今日日の「巖邑小松校」と改めたるものなり

山郭の一僻邑を、れど、中央線、大井線と電車の連絡あり、幾
 玉時代より引継ぎ、信濃南部の要路あり、先古を、飯田
 の要地として、城下町たり引継ぎ、改町の只今あり

左、其の禮を失す、と多く石之出、と、海山、と、谷、と、市井の要

巖邑尋常小学校

【翻刻】

ゆるぎなき 湯津(ゆづ)いはむらの とこしへに
 教の庭も ひらけそはなん
 茂れたく、 御代の恵の雨に着る
 みの、小山の 小松わか竹

○当町 岩村町は岐阜県東端なる恵那郡南部の中心地、旧城下にして元禄十五年松平氏受村以後藩校知新館を号し文武を奨励し地方的文化の他に先ずるものありて今日に至る、小学校ははじめ知新館を受け継ぎ「知新学校」と称し、今日の「巖邑小学校」と改めたるものなり

山間の一僻邑なれども中央線大井線と電車の連絡あり、戦国時代より引継ぎ信濃南部の要路にあり、名古屋飯田間の要地として城下町より引継ぎて現町制の只今に至る

右甚だ礼を失する点た、有之候へども御海容被下度、予算の異(こと)

2. 大成国民学校校歌

作詞：下田歌子 作曲：河野信一

校歌の制定時期：

1940(昭和15)年11月 大成尋常高等小学校校歌

1941(昭和16)年4月 大成国民学校校歌

ゆきしも 雪霜の 深き山辺に お 生いてこそ

よく材とならめ 小松 若竹

うつせみの 世のちりすえぬ 山かげに

教えの庭の 清くもあるかな

前述のように、1940(昭和15)年に、富田小学校と飯峽小学校が統合され、恵那郡本郷村(現、恵那市岩村町)に大成尋常高等小学校が設立される。さらに、翌1941年4月、同校は飯羽間の小学校と合併して大成国民学校となる。戦後、同校は本郷村立大成小学校に改称されたが、1954年の岩村町と本郷村の合併により、岩村町立大成小学校となる。そして、1962(昭和37)年に岩邑小学校に合併し、大成小学校は廃校となる。

資料2-1の楽譜は、恵那市在住の故田中吉徳氏に、生前作成していただいたものである。田中氏は、リコーダーによる音楽教育の第一人者であり、子ども時代、大成国民学校に通学していた。

大成国民小学校の『学校建設誌(自昭和十五年四月)』(資料2-2)には、「昭和十五年十一月三日郷土ノ偉人下田歌子^{マツ}女子ガ両校ニ寄与サレタル和歌ヲシテ時ノ岐阜県男子師範教諭河野信一先生ニ御依頼シ明治節ノ佳日作曲ノ榮ヲ得^こ 茲ニ大成国民学校校歌トシテ決定ス」と書かれている。ここから分かるように、昭和15年の明治節(1940年11月3日)に決

定された大成尋常高等小学校の校歌が、国民学校法の制定により、翌年4月に大成国民学校の校歌となったのである。

『学校建設誌』によれば、校歌の歌詞は、下田が生前、富田小学校か飯峽小学校に（あるいは両校に）「寄与」したものとされる。歌詞にある「小松若竹」は、巖邑尋常高等小学校の校歌でも「美濃の小山の小松若竹」と歌われており、加子母国民学校の校歌でも「をしへの庭の小松なよ竹」という歌詞がある。

だが、田中吉徳氏は、校歌の歌詞は下田から寄与されたものではなく、「当時の先生(校長)が、歌子の詩の中からふさわしいもの」を選んだと指摘している。田中氏のホームページには次のように書かれている(田中吉徳氏ホームページ「音の回想4 校歌と郷土の偉人」<http://yoshi.enat.jp>)。

昔は校歌がある学校は少なかったと思うが、当時、富田小学校には音楽の得意な和田三里先生がおられ、新しい学校の開校に合わせて校歌が作られたようである。

この歌詞は当時の先生が郷土の偉人を身じかなものにし、こういう人たちを目ざして勉学に勤まさせたいという願いで、歌子の詩の中からふさわしいものを選ばれたものと考えられる。

曲については、和田先生に伺ったところ、当時の岐阜師範学校の訓導だった河野信一先生が作曲されたもので、和田先生が、当時、入手困難だった食料を携えて河野先生の所へ出かけ、この詩に作曲してもらったということである。

音楽を教えるようになってから、ふと昔のことが蘇り、この校歌の旋律を思い出してみると、平井康三郎の『平城山』を思わせるような、日本的な曲が浮かび上がってきた。楽譜に書いてみると、単純な4分の4拍子の曲だが、時代を考えると、なかなか味わいのある曲がつくられたものだった。

作曲者の河野信一氏は、岐阜師範学校(現在の岐阜大学教育学部の前身)で訓導(今日の教諭)の職にあり、岐阜県内の学校の校歌を多数作曲している。次に取り上げる恵南実科女学校が、戦後、新教育制度の下で岩村高等学校となった際の校歌も、河野信一氏の作曲によるものである。

【資料2-1】大成国民学校校歌 浄書楽譜

大成国民学校校歌

♩ = 36 明るい気分にて

下田歌子 作詞
河野信一 作曲

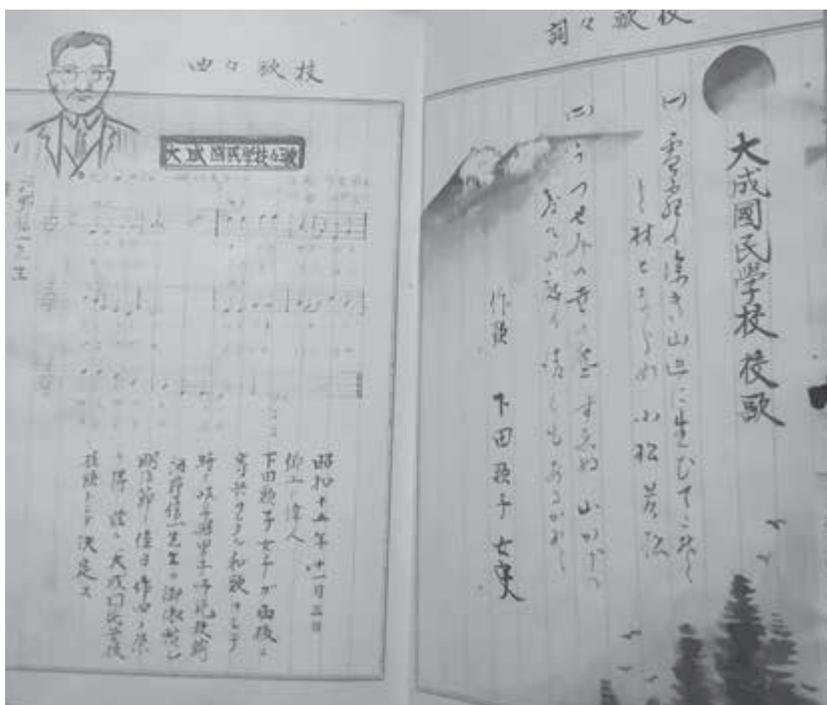
ゆきしもの ふーかきやまーべに
うつせみの よのちりすーあぬ

おひーてこそ よききとなーらめ
やまーかげに おしへのにーはの

こまつわかーまーつ
きよくもあーるかな

実践女子学園下田歌子研究所「うた子だより」第3号、2013年

【資料2-2】大成国民学校『学校建設誌』



*この資料は東野在住の吉村茂夫先生がお持ちの資料を神谷省吾氏から田口修がコピーをさせていただいた。

3. 岐阜県立恵南実科女学校(現、岐阜県立恵那南高等学校)校歌

作詞：下田歌子 作曲：永井幸次

校歌の制定時期：1935(昭和10)年6月

雲にそびゆる 霧ヶ城^{きりがじょう} 見し世の跡は残らねど
霊気は消えずとまりて 馬場殿町^{ばばとのまち}に みなざりぬ

ここに培う 教へ草 仇花^{あだばな}去りて実をおさめ
かへぬは操の千代と陰^{かげ} こぶかく茂る姫小松

なほ弥栄^{いやさか}に茂れかし 御親^{みおや}の杖となるまでに
家の柱となるまでに 茂れや茂れ姫小松

- 1927(昭和2)年4月 岩村町他の組合立による岐阜県恵南実科女学校として開校される
1942(昭和17)年4月 県立に移管し、岐阜県立岩村高等実科女学校となる
1948(昭和23)年4月 岐阜県立岩村高等学校に改組される
2007(平成19)年4月 岐阜県立明智商業高等学校と統合して、岐阜県立恵那南高等学校へ

浅野とく校長から永井幸次氏に作曲依頼した直筆の手紙によると(大阪音楽大学所蔵)、浅野とく氏が下田に校歌の作詞を依頼したとされる。浅野校長の下田に対する思いは相当強かったのだろう。『岩村高等学校70年史』には、1935(昭和10)年8月8日、下田の満81歳の誕生日に行われた下田歌子顕彰碑の除幕式当日に、「校歌を初めて唱和す」と書かれている。この除幕式には下田をはじめ、実践女子学園の教職員や生徒が多数参加しており、下田にとっては故郷に錦を飾る記念すべきセレモニーだった。

そのため、下田もこの校歌には相当の思い入れがあったのかもしれない。他とは違い、3番まであり、和歌ではなく、岩村の地名や女子教育の理念などが詠み込まれた七五調の詩となっている。

【資料3】岐阜県恵南実科女学校校歌 浄書楽譜

岐阜県恵南実科女学校校歌

下田歌子 作詞
永井幸次 作曲

♩ = 96

齊唱

ピアノ伴奏

1. くろしにそひゆあにきしーしーがれいへいじょうみあみ
2. こなほにいそひかかにきしーしーがれいへいじょうみあみ

6
なにしとほのあつとりはてはのみなこもらねさでどめにれかい
なにしとほのあつとりはてはのみなこもらねさでどめにれかい

10
いへいきほまきえしおちすのちなよるまこりかてげにほこし
いへいきほまきえしおちすのちなよるまこりかてげにほこし

14
ばふげとくまましちげにらみひのなめどこりまあつ
ばふげとくまましちげにらみひのなめどこりまあつ

*楽譜の浄書は田口修が行った。

4. 阿木^{あぎ}尋常高等小学校(現、中津川市立阿木小学校)校歌

作詞：下田歌子 作曲：高井徳造
校歌の制定時期：1902(明治35)年

つちかはば 阿木のお山の 若松も
君が御たてと ならざらめやは

阿木^{あぎ}地区は、現在は中津川市であるが、かつては恵那郡阿木村だった。江戸時代には岩村藩の領地であり、何らかの伝手で下田歌子に校歌作詞の依頼がなされたのだろう。1902(明治35)年、阿木尋常高等小学校が作られ、その落成記念に合わせて校歌が制定されたものと思われる。明治30年代には、学校建設に伴って、一種の校歌制定ブームがあったと言われているが、恵那地域における下田の作詞による校歌のさきがけが阿木尋常高等小学校の校歌であることは間違いない。

作曲者の高井徳造氏についての情報は非常に少ないが、明治後期から大正、昭和初期にかけて、音楽教育や幼児教育に関わり、音楽の教科書や音楽の教科教育法の書籍の出版、楽器商などをしていたという情報が得られた。

阿木小学校でも、戦前には歌われていた校歌は戦後歌われなくなり、1970年代に新しい校歌が制定された。だが、阿木小学校の校長室には、今も下田歌子直筆の校歌の額が飾ってある。

【資料4】阿木尋常高等小学校 浄書楽譜

阿木尋常高等小学校 校歌

下田歌子 作詞
高井徳造 作曲

つちかはば あぎのおやまの
わかまつも きみがみたてと
ならざらめやは

*阿木歴史教室編「阿木写真集」(1994年)に掲載されていた楽譜を田口修が浄書した。

5. 久須見尋常高等小学校(現、恵那市立恵那北小学校の前身)校歌

作詞：下田歌子 作曲：不祥
校歌の制定時期：1934(昭和9)年または
1935(昭和10)年

木曾川や 岩間の水の 清き名を
世に響かせよ 学び舎の友

恵那郡長島村立久須見尋常高等小学校は、戦後、1947(昭和22)年に長島町立久棲小学校に改称され、1954年の合併で恵那市が誕生した際、恵那市立久棲小学校となった。しかし、1966(昭和41)年に近隣の3校が統廃合され、恵那北小学校が新設されたことで(一部は長島小学校へ)、歴史の幕を閉じることになった。下田の校歌は戦後歌われなくなり、新しい校歌が制定された。

校歌の作詞を下田に依頼した経緯は、2019年6月に「久須見の歴史委員会」より出版された『久須見の歴史』の中に次のように記されている。

下田歌子の帰郷を待って、昭和9年、長島町長であった小栗忠一の長男の嫁の実家が岩村町富田にあり、下田家と遠縁でもあった関係から下田歌子に依頼して校歌の作成が行われた。

下田歌子女史が岩村に帰郷したのは1935年(昭和10)であることから、年代は不確かであるが、依頼した伝手は間違いのないものと思われる。岩村にある下田の実家は平尾家であるので(「下田家」とあるのは間違い)、その親戚筋に依頼したのではないかと思われる。

作曲者は不明だが、旋律が分かったのは、恵那市役所職員の伊藤英晃氏(当時、教育委員会生涯教育課)が、恵那市久須見の高齢の女性が歌った久須見尋常高等小学校校歌のカセットテープを持っていたからである(テープに録音した年代は不明)。伊藤氏の協力により、2013年にその音源をデジタル化と楽譜に起こすことができた。資料5-1はそうして復元した楽譜である。

また、前掲の『久須見の歴史』の中にも楽譜が記載されている(101～102頁)。資料5-2は、その中に記載された楽譜である。資料5-1と5-2は基本的には同じような旋律ではあるが、かなり異なる箇所もある。

【資料5-1】久須見尋常高等小学校校歌 浄書楽譜 (伊藤英晃氏の音源より復元)

久棲(久須見)尋常高等小学校 校歌

作詞 下田歌子
作曲 不詳



きそがわや いまの
みずの きよきを
よーに ひびかせよ
まなびやのと も

【資料5-2】久須見尋常高等小学校校歌 浄書楽譜 (『久須見の歴史』より)

久棲(久須見)尋常高等小学校 校歌

『久須見の歴史』編集 代表 磯村源蔵氏歌唱を採譜

♩ = 86



きそがわや いまの みずの
きよきを よーに
ひびかせよ まなびやのと も

*楽譜の浄書は田口修が行った。

6. ^{かしも}加子母国民学校（現、中津川市立加子母小学校）校歌

作詞：下田歌子 作曲：信時潔
校歌の制定時期：1943（昭和18）年

千歳へむ 操こだかく 茂らなん
をしへの庭の 小松 なよ竹

^{かしも}加子母地区はかつて恵那郡加子母村だったが、2005年に中津川市に合併される。加子母国民学校は、戦後、加子母村立加子母小学校に改称され、2005年の統廃合で中津川市立加子母小学校となる。

どのような経緯で下田歌子に作詞の依頼がなされたかは不明である。推測ではあるが、加子母を中心とした地域には、名古屋女子大学の創設者である越原はる（春子）氏や、至学館大学（旧、中京女子大学）を創設した内木玉枝氏などがおり、どこかで下田歌子と接点があったのかもしれない。中でも、越原はる氏は、1899（明治32）年ごろ、巖邑尋常高等小学校に併設されていた岐阜県師範学校教習所に通い、その後に加子母地区の小学校に勤務したという記録がある。また、越原氏は、大正デモクラシーの時代に、婦人問題研究会の発起人の一人となって女性の地位向上や女子教育の確立のために東京で活動していたようである。

校歌の作曲は「海ゆかば」の作曲者として有名な^{のぶとき}信時潔氏である。作曲の経緯は不明だが、信時潔氏が戦前、戦中に居を構えていた東京・池袋の家の隣には、加子母の隣町である恵那郡付知町（現・中津川市付知町）出身の画家、熊谷守一氏が住んでいた。信時氏と熊谷氏は単なる隣人ではなく、両家の子ども同士が結婚し、親戚関係にあった。よって、加子母地区の誰かが、同郷のよしみで熊谷氏から信時氏に校歌の作曲を頼んでもらったのではないかと推測される。

楽譜については長らく旋律のみの譜面が知られていたが、作曲者の信時潔氏が教鞭をとっていた東京音楽学校（現、東京藝術大学）の附属図書館にデジタルアーカイブ化されていることが分かった。当初は目録のみの公開であったが、問い合わせをした結果、信時氏の三男の娘である信時裕子氏の許諾が得られ、信時氏直筆の楽譜を閲覧することができた。信時裕子氏は音楽研究者であり、東京藝術大学のデジタルアーカイブにも関わっている。

加子母国民学校の校歌は、他の学校と異なり、戦時下に制定されたため、当時はほとんど歌われることがなかったようだが、戦後、1970年代前半までは校歌として歌われていたという証言が数名の地元の方から得られた。その後、新校歌制定の機運が高まり、下田作

詞の校歌は歌われることはなくなったが、地元の方々の校歌に対する愛着からか、旧校歌の歌詞が刻まれた東濃ひのきの板が今も校内に掲示されている。

【資料6-1】加子母国民学校校歌 浄書楽譜

加子母国民学校校歌

下田歌子 作詞
信時 潔 作曲

心をこめて $\text{♩} = \text{約} 88$

ちとせへむみきを
こだかくしげらなんをしへのにはの
こまつなよたけ

*東京藝術大学附属図書館信時文庫貴重楽譜データベース(試行版)で公開されている楽譜を田口修が浄書した。

7. 陶尋常高等小学校(現、瑞浪市立陶小学校)校歌

作詞：下田歌子 作曲：不祥

校歌の制定時期：1933(昭和8)年

かざす国旗の日の御影 隈なく照らす 文の窓
学びの舎も新しき 光あふるる 御代の春
造る陶器はさまざまに 型はかわれど 変わらぬは
直く正しき人の道 踏みて進めや 諸共に

- 1897(明治30)年 恵那郡猿爪村、水上村、大川村が合併し、陶村が発足する
1932(昭和7)年 陶町となる
1934(昭和9)年 猿爪尋常高等小学校と水川尋常小学校が統合し、陶尋常高等小学校となる
1941(昭和16)年 陶国民学校となる
1947(昭和22)年 陶町立陶小学校となる
1954(昭和29)年 町村合併により瑞浪市発足。瑞浪市立陶小学校となる

瑞浪市は恵那市の西側に隣接するが、陶尋常高等小学校の校歌も下田の作詞による。校歌の作成時期について、陶町の有志で作成している「陶町歴史ロマン」(第20号)の中で、1933(昭和8)年と推測されている。校歌にある「学びの舎も新しき」という文言は、同年の改築を指していると考えられるからである。この年、現在の陶幼稚園のある場所で新校舎の建築が着工され、翌年に猿爪尋常高等小学校と水川尋常小学校が合併して、陶尋常高等小学校がスタートする。校歌の制定は、新しい学校の開設を記念するものであり、それゆえ郷土の名士である下田に作詞の依頼を行ったのだろう。

実践女子学園の下田歌子電子図書館データベースには、下田が書いたメモ書きがある(資料7-2)。そこにも「昭和八年一二月末」という記載があるので、作詞の時期は間違いない。このメモの最後には、「因に記す 郡は予が生誕地なり 同地の老人より懇々との依頼 無據 右を作る」と書かれている。故郷の「老人」に頼まれて作詞をしたというのである。なお、1番の歌詞にある「学びの舎」は、メモでは「学びの場」となっており、「場」に「には」とルビが振ってある。

戦後、この校歌も歌われなくなったものと思われる。「陶町歴史ロマン20」には、1961(昭和36)年ごろ、下田の校歌の歌詞が入った「額」を見たことがあるという証言が載っている。だが、その「額」は「陶小学校の講堂のステージ裏通路」に置かれており、「戦後の教

育では不要なものとなり放置されていた」ものと推測されている。この「額」はその後の移転により、処分されたのではないかということだった。

作曲者については不明であり、楽譜も残されていない。資料7-1の楽譜は、2014年に当時陶小学校の校長だった伊藤陽介氏が、昔の校歌を知る猿爪在住の方に歌ってもらい、地域の方がその録音テープをもとに採譜したものである。歌を歌った方は、学校に「懐かしの母校歌」等の冊子を寄贈したとされる。

【資料7-1】陶尋常高等小学校校歌 浄書楽譜

陶尋常高等小学校 校歌

作詞 下田歌子
作曲 不詳

しかぞすこっきのひのみかげくまなくて
らすふみのまどまなびのにわもあたらし
きひかりあふるるみよのほる

*瑞浪市立陶小学校学校だより「陶苑」(2014年5月27日)に掲載された楽譜を田口修が浄書した。

おわりに

今回の調査を通じて、岩村出身の下田歌子が作詞した校歌について、これまで不明であった点を明らかにすることができた。校歌がどのように制定されたかを知ることで、それに関わった人々の意気込みや志の高さについても理解できたように思う。

だが、校歌の収集は思った以上に困難だった。戦前の教育が否定されたり、歌詞が難解で子どもに分かりにくい等の理由で、下田作詞の校歌が歌われなくなったからである。また、学校の統廃合や校舎の改築などによって、古い資料が破棄されたり、散逸することになった。

戦前、戦中の教育を賛美するつもりは全くないが、校歌は学校や地域の歴史を表すものである。戦前の校歌について知っている方に話を伺ったり、資料を収集したり、できれば復元してデジタルアーカイブ化しておくということは、次の世代に対して、今を生きる私たちの重要な役割ではないかと考えている。

最後に、聞き取り調査に快く応じてくださった地域の方々、そして、校歌を練習し、歌い、録音に協力してくださった子どもたちや先生、そしてコーラスの方々にも心より感謝したい。

すずき・りゅういち／下田歌子記念女性総合研究所客員研究員・実践女子学園岩村親善大使
たぐち・おさむ／一般社団法人 えな健幸生活支援隊 代表・介護予防音楽講師